

★*...-----*★

メールマガジンで語り伝える

「今を生きるスターリイマンの物語」～感謝の風船ラブレター～

2013.12.19 vol.11

★*...-----*★

本メールマガジンは、スターリイマンのお話の創作者
はせがわ芳見とご縁のある大切な方々に心を込めて
毎回9の付く日にお届けさせていただいております☆
配信停止をご希望の方は、お手数ですが
yoshimi@dream-hasegwa.comまでご連絡ください。

☆ごあいさつ☆

皆様、お元気ですか？
今日は冷たい雨の一日になりそうですね。
どうぞ、体調に気をつけてお過ごしくださいね。

さて、今週の15日(日)～18日(水)の昨日まで、
盛岡市、仙台市、福島市、いわき市にある
ISFネットライフの各事業所の皆様に
同社グループの渡邊社長や杉岡専務とご一緒に
クリスマスプレゼントをお届けして参りました。

東北は雪が積もり、一面の銀世界。
厳しい冬の寒さに耐えながら、
今年も多くの方々が仮設住宅で、
クリスマスや年末年始を過ごされることに
心が痛くなってしまいました。

年の瀬も迫り、あと2013年も10日余り。
どんなに忙しくても頑張れるって幸せなことなんだと、
今朝は心に手を合わせました。

さて、本日より第4話「今を生きるスターリイマンの物語」
人とホスピタル研究所 所長の高野登氏をご紹介します。
第1章となる高野登氏との出会い、最後までお楽しみください☆

☆第4話 ふるさとの百年先の絆をつなぐ☆
人とホスピタリティ研究所 代表 高野登氏

～ 第1章 高野登氏との出会い ～

以前から、高野登さんのお名前は知っており、
いつかお目にかかれたらと、私たちは願っておりましたが、
なかなか機会に恵まれませんでした。

しかし、突然、その出会いはやってまいりました。

それも、最初の出会いは、なんと我が家。
八ヶ岳のエミールというホテルで、
大久保寛司さんと出会ってから
たった12日後の2009年5月20日でした。

大久保さんから『fooga』に掲載されていた
絵を観せて頂きたいとの嬉しいお話を頂き、
20日の9時半に我が家にお越し頂くことになっていました。

前日の夜。大久保さんから
「私の他に、高野登さんとIBMの友人2人をお連れ致します」
と、メールを頂き、私たちは思ってもいない急展開に
「ええ!」と驚きと喜びで混乱状態(笑)

しかし、すでにご連絡を頂いた時は、
午後9時をまわっておりましたので、
本当に作品を観て頂くための準備しか出来ませんでした。

翌朝、皆様とのお待ち合わせに間に合うように、
主人と娘は、車で9時半に大宮駅へお迎えにまいりました。

どうやら、高野さんも大久保さんから急にお誘い頂いたそうで、
私が「いらっしやいませ」と、玄関のドアを開けて、
大久保さん、高野さん、間宮さん、松崎さんをお迎えした時、
高野さんは、きょとんとした表情でした。

私はどきどきでした。
4名様を、リビングにお通しして、
先ずは名刺交換をさせて頂いてから、
日本の四季の輝き「春・夏・秋・冬」の200号の作品を、
一作品、一作品、ご覧頂くことにしました。

一番最初は、春の作品から。
次に夏の作品をご覧頂くと、
高野さんが初めてお話してくださいました。

「この絵は、どこの風景ですか？」

主人は、高野さんからの問いかけに、

「イメージで想像で描きました。
夏のイメージって、色々あると思いますが、
ぼくは藍色の世界で、滝とホテルを描き、
日本の夏を表現したくて」

主人の話をお聴きになった高野さんは、

「実は、私の出身は、長野県戸隠で
この夏の作品は、故郷の戸隠の風景ととても似ていて、
戸隠を描いたのかなと思いました」

そうお答えになった高野さんは、作品を観ながら、
幼い頃の戸隠の思い出を話してくれました。

段々と高野さんの表情がとても柔らかくなって、
夏の作品を愛おしそうに、何度も何度も見つめながら、
ふるさとの戸隠でのことを、思い出されているようでした。

その後の秋の作品、冬の作品も色々とお質問頂きながら、
本当にゆっくりと作品を観てくださいました。

11時半ぐらいになって、
「あの、私はちょっとこれから、待ち合わせがあって、失礼します」と、
高野さんは輝く笑顔で、我が家を後に、お帰りになりました。

主人が、大宮駅まで車でお送りさせて頂くと、
高野さんは、「何だかあの夏の絵を拝見したら、元気になりました」と、
明るい声で、丁寧にお礼をされて、車を降りられたそうです。

後から、そのことを主人から聞いて、
高野さんにはお忙しい所、お出で頂いたにも関わらず、
きちんとしたおもてなしも出来ませんでした、
喜んでお帰り頂けて本当に良かったと
胸をなでおろしたことを、今も忘れることはありません。

次に、高野さんにお会いしたのは、
我が家において頂いてから、一週間後の5月28日。
大久保さんのご厚意で、とある講演会にお呼び頂き、
そこでまた高野さんと再会することが出来ました。

講演会の主催者である、中馬企画の中馬幸子さんは、
かんき出版から、高野さんの本を最初に出版された方でした。
その後、かんき出版をお辞めになって、中馬企画を始められました。
<http://www.chumakikaku.com/>

講演会のメインゲストは、大久保寛司氏と高野登氏。
そして、沖縄の南島詩人の平田太一氏でした。
素晴らしい講師の皆様がご登壇される講演会の中で、
大久保さんのご提案により、祐希はスターリィマンの作品を
朗読させて頂けることになりました。

貴重なお時間を頂き、私たちをご紹介してくださって、
心ある皆様との素晴らしい出会いに、本当に有り難く
思い出深いひと時を過ごすことが出来ました。

それから一週間程して、高野さんから、
小包みを贈って頂きました。
中を開けてみると、何と何と、講演会が始まる前に、
大久保さん、平田さん、私たち3人の計5人を
高野さんが撮影してくださったお写真のフォトフレームでした。

裏側には、日付と高野さんの真心のこもった
温かいメッセージが添えてありました。
頂いてからずっと、我が家の出窓に飾らせていただき、
写真を見る度に、いつでもこの日の感動が蘇って来ます。

その後、事あるごとに、高野さんにはいつも温かく応援していただき、
2012年のお正月には、長野の善光寺様で高野さんが開催している
「百年塾」の中でも朗読を聴いて頂く機会を頂いたり、
今年の3月には、中馬さんに高野さんとの夢のような
素敵なコラボレーション企画を催して頂きました。
<http://starryman-smile.cocolog-nifty.com/blog/2013/03/post-d192.html>

また、このメールマガジンでご登場頂いた大山会長や上甲先生は
高野さんとのご縁も深く、お一人、お一人との出会い、繋がりに、
いつも感謝でいっぱいです。

☆第4話 ふるさとの百年先の絆をつなぐ☆
人とホスピタリティ研究所 代表 高野登氏
第2章は、12月29日(日)配信予定です!

「今を生きるスターリィマンの物語」
第4話にご登場頂いた高野登氏との出会いは
いかがでしたでしょうか?

毎回、第1章の原稿を書かせて頂く度に、
毎日毎日、たくさんのご縁を頂きながら、
私たちは生きていることを深く感じ、
感謝でいっぱいになります。

さて、今回は、第2章 高野さんの原風景です。
配信は、12月29日(日)予定です。
皆様、どうぞお楽しみにお待ちください☆

☆後記☆

今週末の12月21日(土)に開催される
佐藤伝さんの朝カフェのゲストとして、
私たち、はせがわファミリーをお招き頂きました!
<http://www.dream-hasegawa.com/about/event.html>

佐藤伝氏こと伝ちゃんは、
私の著書「いつも君のそばにいるよ」(学研パブリッシング出版)に、
推薦文を書いてくださった方なのですが、
学研パブリッシングの遠藤励起編集長に
ご紹介してくださった恩人です。

そして、高野さんとも、交流の深い間柄です。
2009年10月に学研に連れて行ってくれた帰り道、
一本の電話が伝ちゃんの携帯へ…
「ああ 高野さんからの電話だ」と、
伝ちゃんは嬉しそうにお話していたことを、思い出しました。

まだ、この時は高野さんと私は出会ってはおりませんでしたが、
今思えば、すでに高野さんとのご縁は繋がっていたのですね。
縁は不思議です。でも、確かに風船の糸が繋がっていて、
一番大切な時に、ふんわりと届いてくれるんですね。

高野さんもゲスト出演された、伝ちゃんの朝カフェ。
今年最後のイベントの機会となりますので、
お時間がありましたら、是非、21日、お越しくださいませ。
皆様にお会いできるのを楽しみにしております。

お申し込み <http://satohden.com/asacafe/>

今年一年も、素晴らしいイベントの機会を
たくさん賜りまして、お力添え頂きました皆様に
心より感謝申し上げます。

また来年も皆様と素敵な時間をたくさん過ごせるよう
三人で力を合わせがんばります。

はせがわ芳見

☆はせがわ芳見ブログ☆

<http://starryman-smile.cocolog-nifty.com/>

☆「スターリィマンカレンダー2014」完売御礼☆

<http://www.dream-hasegawa.com/about/2014calender.pdf>

★*.....*★

メールマガジンで語り伝える

「今を生きるスターリイマンの物語」～感謝の風船ラブレター～

2013.11.29 vol.12

★*.....*★

本メールマガジンは、スターリイマンのお話の創作者
はせがわ芳見とご縁のある大切な方々に心を込めて
毎回9の付く日にお届けさせていただいております☆
配信停止をご希望の方は、お手数ですが
yoshimi@dream-hasegwa.comまでご連絡ください。

☆ごあいさつ☆

皆様、お元気ですか？

先日の27日で、仕事納めだった方も
多かったことと思います。
今年一年、お疲れ様でした！

年末年始の帰省ラッシュが始まる中、
日本海側や北日本の各地では、
寒波によって、大雪となっているようですね。

どうか事故や体調に気をつけて、
2013年の年の瀬をお過ごしくださいね。

さて、本日お届けするのは、
高野登氏の第2章となる家族の原風景です。

年内最後の配信となります。
是非、最後までお楽しみいただけたら嬉しいです。
それでは、どうぞ宜しくお願い致します☆

☆第4話 ふるさとの百年先の絆をつなぐ☆
人とホスピタリティ研究所 代表 高野登氏

～ 第2章 高野登氏の家族の原風景 ～

私が高野登氏を初めて知ったのは、2008年の12月。

本屋さんでタイトルを見て購入した一冊の本、
「絆が生まれる瞬間～ホスピタリティの舞台づくり～」
(かんき出版)がきっかけでした。
<http://www.kankidirect.com/np/isbn/9784761265694>

また本によって、大切なご縁を頂きました。

私は、ザ・リッツ・カールトン・ホテルの
日本支社長のご経験を経て、
お客様の幸せな絆をつなぐ「おもてなしの心」
そのホスピタリティの真髄を世界中に伝えておられる
高野氏の家族の原風景をお伺いするために、
9月7日にインタビューさせて頂きました。

尚、今回のインタビューの内容は、
私が書きおこした原稿を元に
高野氏にご寄稿頂いた内容になっております。

Q1.高野さんのご家族のことを教えてください。

父、佐久馬は、大正11年生まれ、
母の喜美枝は、大正13年生まれです。
同じ戸隠村(現在は長野市戸隠)の出身です。

父方の祖父は長野県牟礼村(当時)から
戸隠に移ってきたひとで鍛冶屋と農業をしていたそうです。
僕は祖父の記憶はありません。

母の実家は、かつてはかなりの豪農でした。
今は48代目が継いでいます。
かつて親鸞聖人も逗留されたそうです。
母は8人兄妹の4番目。

父と母のお見合いの日、母はお振袖を着て、
馬車(と言っても荷台)に乗って出かけたそうです。

畑仕事をしていた父は、母が来たのを知って、
手を洗っただけで、畑仕事をしていた格好で
そのままお見合いに臨んだそうです。

父にしてみれば、素の自分を見せて
確かめたかったのでしょうか。

母の父親、つまり私のお祖父さんは、
そんな父と意気投合して、父と母が結婚してからは、
何かあると、祖父は、
「佐久馬に聞け、佐久馬に頼め」と言って、
仲良かったですよ。

私は妹と二人兄妹ですが、
生まれてすぐに亡くなった姉と
1歳ちょっとで亡くなった弟がいました。

姉のことを両親はほとんど話さなかったので、
随分あとになってそのことを知りました。

弟のことは、よく覚えています。
台風の前でした。
急に弟の体調が悪くなったのです。

田舎のこと、70歳を越えた開業医と診療所があるだけ。
診療所は台風で早めに閉まっていたので、
開業医の先生に無理にお願いして診て頂いたけど間に合わず…
弟が急にいなくなった意味が、しばらくわからなかったですね。

Q2.高野さんのお父様はどんな人でしたか？

父は若い時、ニコンのエンジニアとして、
東京で勤めていました。
でも、家を継ぐはずの父の兄が、横浜に住むことになり、
父がエンジニアを辞めて戸隠に帰り、
農家を継ぐことになりました。

本人は言いませんでしたが、後々、周りの人から、
エンジニアとして認められていただけに、
家を継ぐのは、本当は不本意だったらしいと聞きました。

農家といっても収入が少ないので、
農協にも勤める兼業農家でした。

私が中学校の頃だったと思いますが、
農協で海産鮮魚などの生鮮食料品を扱うために、
業務用の大型冷蔵庫を入れることになったんです。
そして、生鮮食料品取扱い主任として、
調理師免許を取りました。

当時は、免許を取得するための実技講習の中に、
さつまいも一個から亀や鶴を掘り出す練習もあったらしいのです。
それを家でも時々やってくれましたが、
本当に上手で見事な出来栄でした。

父は多才な人でしたね。料理なども上手で、
母が婦人会などの旅行で留守のときなど、
よく作ってくれたものです。

チャーハンなど、長野市内の中華の店で食べるより、
よほど美味しかった。
でも母の前では、褒めるなとよく父に釘を刺されました。
「上手いのは当たり前だ。おれは調理師免許を持っているんだから」と。

他にも大工道具を買ってきて、家の家具まで作っていました。
それも図面を引いたりせずに作る器用さで、
大工さんも感心するほどでした。
僕は、残念ながら、そんな器用さは受け継ぎませんでした。

Q3.高野さんのお母様はどんな人でしたか

明るくてとにかく人が好きな人でした。
天真爛漫で好きなことをやっている感じでもありましたね。
でも農家の嫁としてはかなりの働き者だったと思います。
叔母たちによると、子供の頃は相当におてんばだったらしいです。

若いころの写真を見ると、わりと美形で、
本人曰く、往年の大女優、山口淑子にそっくり(笑)

戦争中は満州に行って、いろいろな技術を教えていたようです。
その当時、満州にはかなりの日本人がいたのですが、
彼らに声をかけて劇団を創り、李香蘭役をやって、
大評判だったそうです。もちろん、本人の弁ですが(笑)

歌も上手かったです。農家の父のところに嫁いで、
昼間は農業をやっていましたけど、
夜は婦人会のコーラスでリーダーをしていました。

これまた残念なことに、
僕は母の演劇や歌の才能も受け継ぎませんでした。
その分、妹は歌も上手いし、手先は器用だし、
父と母の良い所を受け継ぎましたね。

父も母もいつも人が周りに集まってくるような人間でした。
とくに父は、田舎の厄介な人間関係の調整役のような存在でした。

それから、長野はかつては部落民や韓国人に対して
結構、差別や偏見が強かった土地柄なのですが、
そんな人たちがしょっちゅう我が家に遊びに来て
母を相手におしゃべりをしていました。

日々の愚痴をこぼすというよりも、
みんなで笑ってお茶を飲んでおしゃべりをし、
よく歌を歌っていました。

父も母もひとに対する目線が、公平でしたね。

Q3.高野さんはどんな幼少時代を過ごしましたか？

とにかく内向的な人間でした。
人が怖かったという感じです。

親戚や限られた人以外とは口を聞かない子でした。
小学校高学年までは、家に人が来るのが嫌でした。

もっと小さい時は、極端な人見知りだったので、
人が目の前にいるだけで恐ろしかったですね。
今日は誰かが家に来ると言う、押し入れに隠れていました。

小学校1年～5年生までの担任の先生からは、
「落ち着きがない」「協調性がない」「自分勝手」などと書かれています。
今で言えば、落ちこぼれに近いでしょうか。
評価は低かったですよ。

ひとと面と向き合って話が出来ない人間でした。
その代り、いつも頭の中で、
誰かの声が聴こえるような気がしていて、
その声と対話をしていました。
今思うとあれは何だったのだろうと思いますね。

僕が一番影響を受けたのは、
父や母というよりも、母方の祖父だったと思います。
僕の内向的なところも、ちょっと変な(!)ところも全部含めて、
祖父は僕を無条件で受け入れてくれました。

子どもの頃、祖父は、私を山に連れて行って来て、山のことを教えてくれましたね。木のこと、水のこと、風のこと、季節のこと、雲のことなど今思うと祖父の農哲学を聞いていたんだと思います。

神社の宮守もしていた祖父は、尺八も太鼓も上手で機会があると披露してくれました。

親鸞上人が逗留された記録も残っています。日照りが続いていた時で、上人が刺した杖のところから井戸が湧き出てきたそうです。それを機に、それまで河原だったのを清水の姓に変えたそうです。

子供心に、祖父は田舎の人なのに、田舎臭さのないひとだなあと感じていました。気品や、剣豪の持つ重力を感じる人でしたね。そんな祖父の影響でしょうか、僕ももしかすると、神主をやりたいかったのかも知れないなと思うこともあります。

Q4.夢を持ったのはいつ頃でしたか?その夢はどんな夢でしたか?

僕は夢を持たなかった子供でした。人と会うのが苦手な、子供らしくない子供でしたからなるべく人と会わない仕事はないか思っていたほどです。

それで、簿記の資格を取って、店の裏方で帳簿付けをしていれば、人と会わなと思い、長野商業高校に入学しました。

入学して三か月ぐらいして、選択ミスに気づきました(笑) 商売で人に会わない仕事はない。考えれば当たり前ですね。それで、先生に相談したんです。

すると、先生に、2年生になったら進学コースに編入して、理工のアシスタント、いわゆる、実験する研究室でビーカーや試験管を洗う仕事に就いたらと言われて、「なるほど!」と思い、進学クラスに編入しました。

3年の時、受験雑誌の資料請求ハガキが目にとまりました。「日本で初の国際ホテルマン養成スクール開校」なぜかこのハガキが気になって仕方ありませんでした。

切り取って机の上に置いたこのハガキの存在が、
日に日に大きくなっていくようで…。
それで、資料請求ぐらいはいいだろうと思って、投函したのです。

やがて、資料が届いたのですが、華やかなホテルで
外人たちと一緒に働いている自分の姿がイメージ出来たんです。

あとはまるで引き寄せられるように、
誰にも内緒で願書を出しました。

一次試験が受かり、面接と10万円位を
支払わなければならなくなったことを両親に話すと、
ひと言、「お前には絶対向いていない。先生に相談しろ」

先生も「君が一番向いてない仕事だ。
自分の人生をどうするつもりだ。私は責任を待たない」
と怒られました。

先生にしてみたら、高1の時から、
編入試験を色々と配慮してくれたり、
知り合いの理工学部の大学にも相談してくれたり、
ずっと私の将来を考えてくださっていたので、
怒るのも当然ですよ。

Q5.ホテルスクールではどんなことを学んだのですか？

学校で学んだことは、ほとんど覚えていません(笑)。
ただ、強烈な個性を持った同級生たちに揉まれて、
私の内側の殻が少しずつ、破られていく感覚がありました。

ホテルスクールは2年間で、1年の時から
色々なホテルに研修に出されました。
そこでの研修費を学校が積み立てて、
2年目の夏に行われた、3週間のアメリカ研修(修学旅行)の
費用にあてたんです。

この旅行が衝撃的で、僕の運命を決めることになりました。
バンクーバーから入り、シアトル、サンフランシスコ、
ロサンゼルスまでのバス旅行。ラスベガスにも寄りました。
大学の寮や安いモーテルに泊まりながら、
名だたるホテルで研修も受けました。

当時、西海岸をシアトルからロサンゼルスまで、
ルート5(5号線)を、バスで走ると、見渡す限り一面の畑でした。
その畑から、セスナ機が飛び立ち、農薬散布をしていたんです。
それも一つや二つの畑ではありません。あちこちの畑から
セスナ機が上がったり、下がったりしている。
それをみて、アメリカはとんでもない国だなあと思い、
アメリカに行きたい、ここで働いてみたいと強く思いました。

修学旅行から帰り、スクールの先生に、
アメリカに行きたいと話したら、日本のホテルで力をつけて、
それから行った方が良いとすぐに反対されました。

2月の終わり頃には、2~3人を残して、
ほとんど就職先が決まっていた中、
ある先生から、「長野にある北野建設という会社が、
ニューヨークに新しくホテルを建ててらしく、
長野県出身の元気な若者を探しているから、
君、行って見ないか」と声をかけていただいたのです。

その翌々日には、銀座の東京本社で面接があり、
高校の大先輩である社長に気に入られたのか、
その場で入社が決まりました。そして就労ビザが下り次第、
ニューヨークに行くことが決まったのです。

Q6.その後のアメリカでの日々で大変だった出来事は何ですか？

北野ホテルは2年契約で、
74年から76年の終わりまで勤めていました。

2年目の夏に、友人と、ウエストサイドのあたりの、
当時はあまり近づかないほうがいいような所で飲んでいました。
帰り道、酔っぱらってブロードウェイの車道にはみだして、
後ろから来た車にはねられたんです。

体が宙に浮いて、友人のも宙に浮いているのが見えて、
私は2回転ぐらいした後、道路にドスンと落ちました。
当然、打ったところは痛かったけど、
奇跡的に大した怪我はありませんでした。

一方の友人は血だらけで、私は彼を背負ってタクシーを呼び、
ホテルに戻ってから、再度病院まで連れていきました。
結局、彼は入院三か月の大けがでした。

2年が経ち、ほんとうは北野建設の東京本社に戻って、海外ホテル事業部に異動する予定でしたが、ニューヨークを去るのが惜しくなっていました。せっかくアメリカに慣れてきたのに、2年間で帰るのは惜しい。もっとこの国を思い切り呼吸してみたい。

それで、あてもなかったのに、キタノホテルを辞める決心をしました。それから働き口を探そうとしましたが、グリーンカード(永住権)がなかったら、働けないことに気が付きました。

ニューヨークには、グリーンカードを取るために、5年や7年も待っている日本人がたくさんいました。そこで、この街では、無理だと判断し、ペンシルバニアでカンボジアからの避難民に混じって取ろうとフィラデルフィアに移ったのです。

当時、ロッキー青木さんというひとが始めた「ベニハナ」という鉄板焼きが大ヒットしていました。その「ベニハナ」スタイルの店で、名目はマネージャー、実質はシェフをしながら働き、8カ月でグリーンカードを取り、ふたたびニューヨークに戻りました。

そこが、本当の意味で、僕のアメリカ生活のスタート地点になったのだと思います。

これまでの僕の人生は、ひと言でいうと「運と縁」に守られている人生、です。

いつも大変な思いをする前に止められている、あるいは、誰かが出てきて助けてくれる。そんな感じなのです。

やっぱり何かに守られているんじゃないかな、と思うことが度々あります。

Q7.高野さんにとってのスターリイマンは誰ですか？

今振り返ると、本当に色々な人がその時、その時の私の状況に合わせて、私に風船のバトンを届けてくれました。そのすべての人達が、私にとってのスターリイマンです。

☆第4話 ふるさとの百年先の絆をつなぐ☆
人とホスピタリティ研究所 代表 高野登氏
第3章は、1月9日(木)配信予定です!

第4話「今を生きるスターリマンの物語」
高野登氏の原風景、いかがだったでしょうか?

いつもよりゆっくりと過ごせる、この年末年始。
今までなかなか聞く機会のなかった
身近な方の原風景をお聞きしたり、
ご自身の原風景を振り返って頂くのも素敵ですね。

さて、次回はいよいよ第3章として、
高野氏のスターリマンに宛てたお手紙をご紹介します。

配信は、年明け1月9日(木)予定です。
皆様、どうぞお楽しみに☆

☆後記☆

私がお話の創作を通して表現してきた
「スターリマン」のように、
この現実の世界に輝きを届けていらっしゃる
「今を生きるスターリマン」の物語。

第1話 日本理化学工業の大山泰弘会長から始まり、
第2話 志ネットワーク 主宰 上甲 晃 氏
第3話 人と経営研究所 所長 大久保 寛司 氏
第4話 人とホスピタリティ研究所 所長 高野 登 氏

お一人お一人に、インタビューをさせて頂き、
その方の今を形作る、様々な背景や想いを知ることが出来、
私にとって、毎日が感動の連続でした。

その感動を、大切な皆様方と
メルマガを通じて共有させて頂き、
これ以上の幸せなことはありません。

かけがえのないご縁に心より感謝申し上げます。
本当にどうもありがとうございます。

本日は、第6話でご紹介予定の
鬼澤慎人氏にインタビューをさせて頂く為に、
水戸へと出かけて参ります。

また素晴らしい感動を皆様にお届け出来るよう、
来年もがんばって配信してまいりたいと思います。
今後ともどうぞ宜しくお願い致します。

それでは、皆様、良い新年をお迎えくださいませ。

はせがわ芳見

☆はせがわ芳見ブログ☆

<http://starryman-smile.cocolog-nifty.com/>

☆「スターリィマンカレンダー2014」完売御礼☆

<http://www.dream-hasegawa.com/about/2014calender.pdf>

★*...-----*★

メールマガジンで語り伝える

「今を生きるスターリイマンの物語」～感謝の風船ラブレター～

2014.01.09 vol.13

★*...-----*★

本メールマガジンは、スターリイマンのお話の創作者
はせがわ芳見とご縁のある大切な方々に心を込めて
毎回9の付く日にお届けさせていただいております☆
配信停止をご希望の方は、お手数ですが
yoshimi@dream-hasegwa.comまでご連絡ください。

☆ごあいさつ☆

皆様、新年明けましておめでとうございます。
今年もどうぞよろしく願い申し上げます。

今年の元旦。私たち3人は、朝6時に家を出て、
地元大宮の武蔵一宮「氷川神社」様に
初詣に出かけました。

三の鳥居に入った直後、
神神しく輝く初日の出を拝むことが出来て
ありがたいと、思わず手を合わせながら
穏やかな一年でありますように…祈りました。

皆様はどのような元旦をお迎えでしたか？
2014年が皆様にとって幸せな年となりますよう、
心よりお祈りいたしております。

さて、「今を生きるスターリイマンの物語」
第4話もいよいよ最終章。

高野登氏のスターリイマンに宛てた
感謝の風船レターから
2014年のメルマガをスタート致します。

それでは、どうぞ最後までお楽しみください☆

☆第4話 ふるさとの百年先の絆をつなぐ☆
人とホスピタリティ研究所 代表 高野登氏

～ 第3章 スターリイマンへの感謝の風船レター ～

『ニューヨークで出会ったスターリイマン、デボラへ』

1974年秋。僕は単身、ニューヨークに渡った。
現地のホテルで働くためだ。

ニューヨークでの生活が始まってまもなく、
住んでいたアパートの近くにあった
Bar Underground(アングラ)が
僕の行きつけの店になった。

通りの半地下に沈んだ、いわゆる場末のバーだ。
僕にはたまらなく「生きたニューヨーク」を
感じさせるバーだった。

堅気らしい客は一人もない。

ジーンズにジャンパーの目つきが鋭い男、

薄汚れたチノパンの上にたっぷりと
腹の脂肪がはみだしているスキンヘッドの男、

目のやり場に困るようなミニスカートの女。

まともなスーツも、ネクタイも見当たらない。

黒人のデボラもそんな常連客の一人だった。

彼女の商売は売春婦。
真っ赤なマニキュアに口紅、
短いスカートを穿いていた。

もちろん商売の“交渉”はしなかった(笑)。

デボラがどんな事情で
“このビジネス”に入ったのかは聞かなかった。
でも下流社会ではよくあることだ。

日本でも昔から、貧しさに直結している
ビジネスの代表的なものだ。

話をするようになって気がついたのだが、
デボラはかなり頭の良い女性だった。
なによりユーモアがあり、ジョークが面白い。
そして明るい。

デボラとは妙に気が合って、
それからたびたびカウンターで
生きた英語のレッスンを受けることとなった。

僕が仕事でチップをもらった日は、
デボラにおごった。
彼女はウォッカベースのカクテルが好きで、
3、4杯は軽く空けた。

デボラのビジネスが好調だった日は、
夜遅くに入ってきて機嫌よく僕にビールをおごってくれた。

寒い冬の夜などはビジネスが不振らしく、
9時位からカウンターにもたれて
ウォッカ・サワーを飲んでいることもあった。
ビジネス不振にあえぐ個人事業主というところか。

ニューヨークに来て2回目のクリスマスシーズン。

夜遅くにアングラのカウンターで飲んでいると、
デボラが仲間の黒人女性と3人で入って来た。
みんな上機嫌だ。デボラが彼らに僕を紹介した。

カウンターに座るとそれぞれが、
自分のドリンクを注文していた。

やはり三人の中ではデボラが親分格だ。
体格にも風格にも圧倒的な存在感がある。

デボラを見ていると、
ひとの生き方とは何かを考える。

彼らのビジネスは普通の社会では認められにくいものだ。

でも目の前にいるこの三人の明るさはなんだろう。

そればかりか、卑しさが感じられない。
ある種の透明感すら感じる。じつに不思議だった。

バーテンが飲み物のお代りをカウンターに置いて、
「店のおごりだよ」といった。
そうだクリスマスシーズンだった。

人も店も、街中がどことなく人に優しくなる季節だ。

しばらくしてデボラに、
「明日があるから僕はそろそろ帰る、じゃあ」と
声をかけて席を立とうとした。

すると僕の腕に手を置いて、
「ちょっと待って」といって、
古いハンドバッグの中から
小さな茶袋をとりだして僕に手渡す。

「開けてみて」と合図をしている
彼女の目が悪戯っ子のようだ。

手袋が入っていた。

簡単なラッピングで、
高そうなものではなかったが、
とても温かそうに見えた。

「メリークリスマス、私のベイビー、タカ。
あなたに神のお恵みを！」

「ありがとう、デボラ」。
感謝の思いを込めて、初めてデボラをハグした。

大きくて温かい身体だった。

涙が止まらなかった。

スターリィマン、デボラ。

僕は、あなたのお蔭で、
アメリカで生き抜く決心がついたんだ。

☆次回、「今を生きるスターリイマンの物語」
第5話は、1月19日(日)配信予定です!

高野登氏のスターリイマンへ宛てた
感謝の風船レターはいかがでしたでしょうか?

デボラさんとの出会い。
そして、アメリカでのご縁が、ひとつひとつ風船となって、
現在の高野登氏へと導き、輝かせているのだなあと
感動でいっぱいになりました。

私が2008年12月にタイトルだけで手にした高野登氏の本。
「絆が生まれる瞬間～ホスピタリティの舞台づくり～」の冒頭には、
このような言葉が綴られています。

人間関係をつむぐ大きなカギは
ホスピタリティの心です。

相手を理解したいという気持ち、
言葉のキャッチボール。

コミュニケーションを重ねて初めて
「感性のレーダーとアンテナ」が磨かれ、
お互いの絆が育まれるのです。

私たち家族3人が、絵とお話と朗読で
描き伝えているスターリイマンの世界、
みんなの心と心をつないでいく
「コミュニケーションアート」の発信と
共感、共鳴する思いを改めて感じました。

高野さんに、この本へのサインをお願いした所、
こんな素敵な言葉を添えてくださいました。

長谷川芳見さんとステキなファミリーへ
絆の不思議さ!

2010年5月20日 高野登

本当に不思議で、素晴らしい絆を
高野さん、どうもありがとうございます！

さて、次回のメルマガは
第5話「今を生きるスターリマンの物語」を
お送り致します。

配信は、1月19日(日)予定です。
皆様、どうぞお楽しみにお待ちください☆

☆後記☆

私が最初に手掛けたスターリマンの作品
物語「ヒューマンズ☆LOVE」を描いて、
今年は25年の節目の年となります。

もう十数年もこの作品を発表していませんが、
今年は是非、皆様に、観て聴いて頂ける機会を
持ちたいと思っています。

どんなに月日が流れても
常に原点に戻って、今の自分を見つめてみると、
ずっと、大切なことを気づかせてくれていた
私のスターリマンに出会えます。

1月18日の講演会では、
あなたのかげがえのないスターリマンに
きっと出会える幸せな時間になることを願い、
とても楽しみにしています。

それでは皆様、本日も最後までお読みいただき、
誠にありがとうございました☆

5日に小寒を迎え、20日は大寒と、
これから益々寒さが厳しくなる季節です。
どうか風邪にお気をつけて、お過ごしくださいね。

はせがわ芳見